

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化					
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 蓄積性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
殺菌 消毒 成分	アクリノール 液	グラム陽 性、陰性菌に 有効で、特に 連鎖球菌、 ウエルシュ 菌、ブドウ球 菌、淋菌に対 し、静菌及び 殺菌作用が ある。作用機 序は、生体で アクリジニウ ムイオンとな り細胞の呼吸 酵素を阻害す るといわれて いる。				頻度不明(塗 布部の疼痛、 発赤、腫脹等 潰瘍、壊死)	頻度不明(過 敏症)						0.05~0.2w/vの液として 使用する。	化膿局所の消 毒、泌尿器・産 婦人科術中術 後、化膿性疾 患(せつ、よう、 扁桃炎、副鼻 腔炎、中耳炎)
殺菌 消毒 成分	エタノール	消毒用エタ ノール<ヤ クハン>、 OTCとして 使用されて いるのは「消 毒用エタ ノール」と同 じ濃度	本剤は、使用 濃度において 栄養型細菌 (グラム陽性 菌、グラム陰 性菌)、酵母 菌、ウイルス 等には有効で あるが、芽胞 (炭疽菌、破 傷風菌等)及 び一部のウイ ルスに対する 殺菌効果は 期待できな い。エタノー ルの殺菌力 上の最適濃 度について は、その試験 方法により 一定しないが、 通常70%と称 してよく、この 濃度に対して は皮膚に對し て拡散及び 揮発性も適度 で、表皮を損 傷することも なく、無害で ある。			頻度不明(刺 激症状)	頻度不明(過 敏症)	損傷皮膚及び粘 膜(刺激)			・経口投与しない こと・過量投 与・全身の熱感 ・味覚・嗅覚機能 の低下、顔面紅 潮、発汗、悪心、 嘔吐、急性胃 炎、マロリーワ イス症候群、口 渇、利尿、痙攣 閾値の上昇、呼 吸促進、心搏亢 進、血圧下降、 多事感、酩酊、 身体失調、歩行 困難、急性アル コール性ミオパ チー、記憶障害、 感情不安定、代 謝性アシドーシ ス、低血糖、体 温低下、脱水、 失禁、肝機能障 害、呼吸抑制、 昏睡(エタノール の血中濃度が0.4 ~0.5%で呼吸停 止が起こる)、催 眠剤との同時服 用や顔部外傷の 合併にも注意す る。	・同一部位に 反復使用する 場合には、 脱脂等による 皮膚荒れを 起こすことが ある・広範 囲又は長期 間使用した 場合には、蒸 気の吸入に 注意する	本品をそのまま消毒部位 に塗布する。	手術・皮膚の 消毒・手術部 位(手術野)の 皮膚の消毒・ 医療用具の消 毒

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状態等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化			
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	用法用量	効能効果		
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	
殺菌消毒成分	塩化ベンザルコニウム	0.1w/vチアミトール水	・本剤は使用濃度において、栄養型細菌(グラム陽性菌、グラム陰性菌)、真菌等には有効であるが、結核菌及び大部分のウイルスに対する殺菌効果は期待できない。イオン界面活性剤であるので、表面張力を低下させ、清浄作用、乳化作用等を示す。 ・作用機序は、陰電荷を帯びる細菌に陽電荷を帯びる塩化ベンザルコニウムが菌体表面に吸着・集積され、菌体たん白を変性させ殺菌作用をあらわす。					頻度不明(過敏症)	粘膜、創傷面または炎症部位に長期または広範囲に使用しないこと				・原液は皮膚・粘膜に付着及び眼に入らないように注意する(刺激性がある)。 ・炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用:正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい。また、使用後は滅菌精製水で水洗する。 ・強い刺激または眼に使用する希釈水溶液は、調製後減菌処理すること。 ・経口投与しないこと。洗眼には使用しないこと。 ・密封包装、ゼップス包装、パックに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。	・粘膜、創傷面または炎症部位に長期または広範囲に使用しないこと。 ・全身吸収による筋脱力を起こすおそれがある。		効能・効果:用法・用量(塩化ベンザルコニウム濃度) ①手指・皮膚の消毒:通常石けんで十分に洗浄し、水で石けん分を十分に洗い流した後、塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で清拭する。術前の手洗の場合には、5~10分間ブラッシングする。 ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒:手術局所皮膚面を塩化ベンザルコニウム0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.2%溶液を塗布する。 ③手術部位(手術野)の粘膜の消毒、皮膚・粘膜の創傷部位の消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.025%溶液を用いる。 ④感染皮膚面の消毒:塩化ベンザルコニウム0.01%溶液を用いる。 ⑤医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液に10分間浸漬するか、または厳密に消毒する際は、器具を予め2%炭酸ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.1%溶液中で15分間煮沸する。 ⑥手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒:塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液を布片で塗布・清拭するか、または噴霧する。 ⑦腔洗浄 塩化ベンザルコニウム0.01~0.05%溶液を用いる。 ・炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用:正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい	

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 留意性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの			過量使用・誤使 用のおそれ
殺菌消毒成分	塩化ベンゼ ニウム	ハイアミン 液:塩化ベン ゼトニウム 10w/v%	芽胞のない細菌、真菌類に広く抗菌性を有し、グラム陽性菌には陰性菌よりも低濃度で効果を示す。一方、結核菌及び大部分のウイルスに対する殺菌効果は期待できない											・原液は皮膚・粘膜に付着及び眼に入らないように注意する。・炎症または鋭刺傷性の部位(粘膜、創傷面、陰部等)への使用時は低濃度・経口投与しないこと。・密封包装、ギプス包帯、パットに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。 ・深い創傷又は膿にしようする場合の希釈液は注射用蒸留水か滅菌精製水を使用		①通常石けんで十分に洗浄し、水で石けん分を十分に洗い落した後、塩化ベンゼトニウム0.05~0.1%溶液(本剤の100~200倍希釈液)に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で清拭する。術前の手洗の場合には、5~10分間ブラッシングする ②手術前局所皮膚面を、塩化ベンゼトニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)で約5分間洗い、その後塩化ベンゼトニウム0.2%溶液(本剤の50倍希釈液)を塗布する ③塩化ベンゼトニウム0.01~0.025%溶液(本剤の400~1,000倍希釈液)を用いる ④塩化ベンゼトニウム0.01%溶液(本剤の1,000倍希釈液)を用いる ⑤塩化ベンゼトニウム0.025%溶液(本剤の400倍希釈液)を用いる ⑥塩化ベンゼトニウム0.02%溶液(本剤の500倍希釈液)を用いる ⑦塩化ベンゼトニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)に10分間浸漬するか、またはは密閉に消毒する際には、器具を予め2%炭酸ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベンゼトニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)中で15分間煮沸する ⑧塩化ベンゼトニウム0.05~0.2%溶液(本剤の50~200倍希釈液)を布片で塗布・清拭するか、または噴霧する	①手指・皮膚の消毒 ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒 ③手術部位(手術野)の粘膜の消毒、皮膚・粘膜の創傷部位の消毒 ④感染皮膚面の消毒 ⑤結膜のうの洗浄・消毒 ⑦医療用具の消毒 ⑧手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒
殺菌消毒成分	オキシドール	オキシドール	殺菌消毒作用:使用濃度において栄養型細菌に対して殺菌作用を示すが、その作用は緩和で持続性がない。発泡による機械的洗浄化作用がある。			空気露粒	運用:口腔粘膜刺激			瘻孔、縫刺等本剤を使用した際に体腔にしみ込むおそれのある部位				鋭刺傷性の部位には、正常の部位に使用する場合よりも低濃度とする。深い創傷に使用する場合の希釈液としては注射用水か滅菌精製水を用い、水道水や精製水を用いない。外用にのみ使用し、内服しないこと		①原液のままあるいは2~3倍希釈して塗布・洗浄する。②原液のまま塗布、滴下あるいは2~10倍(耳科の場合、時にグリセリン、アルコールで希釈する)希釈して洗浄、噴霧、含嗽に用いる。③原液又は2倍希釈して洗浄・拭拭する。④10倍希釈して洗口する。	①創傷・潰瘍の殺菌・消毒 ②外耳・中耳の炎症、鼻炎、咽喉頭炎、扁桃炎等の粘膜の炎症 ③口腔粘膜の消毒、扁桃(う)及び根管の清掃・消毒、歯の洗浄 ④口内炎の洗口

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I 用法用量	J 効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		過敏性	適応薬	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ			
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		過敏性	適応薬	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ	用法用量	効能効果	
殺菌成分	クレゾール 石ケン液「ヤ クハン」:ク レゾール石 けん液を使用 した	薬理作用や 毒性はクレ ゾールとほぼ 同様で、その 殺菌力は使用 した原料によ って多少異なる。本剤は 使用濃度にお いて抗酸菌を 含む通常の細菌には有効 であるが、芽胞および大 部分のウイルスに対する殺 菌効果はほとんど期待でき ない。				頻度不明(過 敏症)	損傷皮膚					・過量投与 (16mL未満服用 時)悪心、嘔吐、 下痢、口腔・食 道・胃粘膜の腐 食に伴う灼熱感 と疼痛、粘膜白 色変性、咽頭・喉 頭浮腫、上気道 の狭窄、頭痛、 めまい、(16mL 以上服用時)吐 血、食道潰瘍、 下血、痙攣、筋 線維性變縮、腱 反射消失、せん 妄、興奮、不穏、 瞳孔縮小、体温 低下、代謝性ア シドーシス、メ ヘモグロビン血 症、貧血、溶血、 血圧低下、チア ノーゼ、心筋炎、 不整脈、ショク ク、呼吸麻痺、肺 水腫、昏睡、心 停止、肝障害、 腎障害(急性尿 細管壊死による)。・皮膚に付 着した場合、白 色または茶褐色 の化学熱傷を認 める。・経口 投与しないこと ・眼に入らないよ うにすること ・希釈する水にアル カリ土金属 塩、重金属塩、 第二鉄塩、陰類 が存在する場 合、変化すること がある。常水で 希釈すると次第 に混濁して沈殿 を生ずることがあ るが、このような 場合は上澄み液 を使用。	①クレゾールとして0.5~ 1% (クレゾール石ケン液と して1~2%) ②クレゾール として1.5% (クレゾール 石ケン液として3%) ③ク レゾールとして0.1% (ク レゾール石ケン液として 0.2%) 炎症又は高刺激 性の部位に使用する場 合には、正常の部位に使用 するよりも低濃度とする	①手指・皮膚 の消毒 手術 部位(手術野) の皮膚の消毒 医療用具の消 毒 手術室・病 室・家具・器 具・物品などの 消毒 ②排泄 物の消毒 ③ 腫の洗浄		

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化					
評価の視点	薬理作用	相互作用	重要な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
殺菌消毒成分	塩酸クロルヘキシジン	グルコン酸塩として、5%ヒピテン液	抗菌作用(in vitro試験)・広範囲の微生物に作用し、グラム陽性菌には低濃度でも迅速な殺菌作用を示す。グラム陰性菌には比較的低濃度で殺菌作用を示すが、グラム陽性菌に比べ抗菌力に幅がみられる。芽胞形成菌の芽胞には効力を示さない。結核菌に対して水溶液では静菌作用を示し、アルコール溶液では迅速な殺菌作用を示す。真菌類の多くに抗菌力を示すが、全般的に細菌類よりも抗菌力は弱い。ウイルスに対する効力作用機序・作用機序は十分には解明されていないが、比較的低濃度では細菌の細胞膜に障害を与え、細胞質成分の不可逆的漏出や酵素阻害を起こし、比較的高濃度では細胞内の蛋白質や核酸の沈着を起こすことが報告されている。			ショック(0.1%未満)	0.1%未満(過敏症)		・カロルヘキシジン製剤過敏症の既往歴・脳、腎臓、耳(内耳、中耳、外耳)(聴神経及び中枢神経)に対して直接使用した場合は、瞳孔、神経障害を来することがある。・腱、膀胱、口腔等の粘膜面(ショック症状の発現が報告されている)・産婦人科用(膈・外陰部の消毒等)、泌尿器科用(膀胱・外性器の消毒等)には使用しない。・眼に使用しない		・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。・外用にのみ使用する。・眼に入らないように注意する。		本品は下記の濃度(グルコン酸クロルヘキシジンとして)に希釈し、水溶液又はエタノール溶液として使用する。効能・効果 用法・用量:①手指・皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)(通常時:0.1%水溶液(30秒以上)汚染時:0.5%水溶液(30秒以上))②手術部位(手術野)の皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈)(0.5%エタノール溶液)③皮膚の創傷部位の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈)(0.05%水溶液)④医療用具の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈)(通常時:0.1%水溶液(10~30分)汚染時:0.5%水溶液(30分以上)緊急時:0.5%エタノール溶液(2分以上))⑤手術室・病室・家具・器具・物品等の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈)(0.05%水溶液)	

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの		
殺菌消毒成分	ポビドンヨード	イソジンスクラブ (75mg/mL) 液剤	抗殺菌作用、 抗ウイルス作用を有する			ショック、アナ フィラキシー 様症状(0.1% 未満)	0.1%未満 (接触性皮膚 炎、そう痒 感、灼熱感、 皮膚潰瘍、血 中甲状腺ホル モン値 (T3、T4値等) の上昇ある いは低下な どの甲状腺 機能異常)、 新生児に使 用し、一過性 の甲状腺機 能低下を起 したとの報告	0.1%未満 (過敏症)		本剤又はヨウ素に 対し過敏症の既往 歴	甲狀腺機能に異 常、重症の熱傷、 妊娠中・授乳中 の婦人(長期・広 範囲)		経口投与しない こと。深い創傷に 使用する場合は 希釈液としては、 注射用水か滅菌 水を用い、水道 水や精製水を使 用しない。石けん 類は本剤の殺菌 作用を弱めるの で、石けん分を 洗い落としてから 使用すること。	妊娠中及び 授乳中の婦 人には、長期 にわたる広 範囲の使用 を避けること	手指・皮膚の消毒:本剤の 適量を用い、少量の水を 加えて摩擦し、よく泡立 たせたのち、流水で洗 う。手術部位(手術野)の 皮膚の消毒:本剤を塗布 するか、または少量の水 を加えて摩擦し、泡立 たせたのち、滅菌ガーゼ で拭う。	手指・皮膚の 消毒、手術部 位(手術野)の 皮膚の消毒
殺菌消毒成分	ポビドンヨード	イソジン液 (100mg/mL) 液剤	抗殺菌作用、 抗ウイルス作用を有する			ショック、アナ フィラキシー 様症状(0.1% 未満)	0.1%未満 (接触性皮膚 炎、そう痒 感、灼熱感、 皮膚潰瘍、血 中甲状腺ホル モン値 (T3、T4値等) の上昇ある いは低下な どの甲状腺 機能異常)、 本剤を新生 児に使用し、 一過性の甲 状腺機能低 下を起した との報告、ポ ビドンヨード 製剤を腫内 に使用し、血 中総ヨウ素値 及び血中無 機ヨウ素値が 一過性に上 昇したとの報 告、本剤を妊 婦の腫内に 長期間使用 し、新生児に 一過性の甲 状腺機能低 下があらわ れたとの報 告、ポビド ンヨード製剤 を腫内に使 用し、乳汁中 の総ヨウ素 値が一過性 に上昇した との報告	0.1%未満 (過敏症)		本剤又はヨウ素に 対し過敏症の既往 歴	甲狀腺機能に異 常、重症の熱傷、 妊娠中・授乳中 の婦人(長期・広 範囲)		経口投与しない こと。深い創傷に 使用する場合は 希釈液としては、 注射用水か滅菌 水を用い、水道 水や精製水を使 用しない。石けん 類は本剤の殺菌 作用を弱めるの で、石けん分を 洗い落としてから 使用すること。	妊娠中及び 授乳中の婦 人には、長期 にわたる広 範囲の使用 を避けること	手術部位(手術野)の皮膚 の消毒、手術部位(手術 野)の粘膜の消毒:本剤を 塗布する。皮膚・粘膜の 創傷部位の消毒、熱傷皮 膚面の消毒、感染皮膚面 の消毒:本剤を患部に塗 布する。	手術部位(手術 野)の皮膚の消 毒、手術部位 (手術野)の粘 膜の消毒、皮 膚・粘膜の創 傷部位の消 毒、熱傷皮膚 面の消毒、感 染皮膚面の消 毒

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果						
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性		適応禁忌		慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)					症状の悪化 につながるお それ		適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)		使用方法(誤使用のおそれ)	
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性		適応禁忌		慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)		症状の悪化 につながるお それ		適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)		使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの									使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果		
殺菌消毒成分	マーキュロクロム	「純生」マーキュロ液	本薬は水溶液中でHgイオンを解離している。皮膚、粘膜に塗布すると、このイオンが細菌のSH基を有する酵素と結合して、これを不活性化させることにより、消毒効果をあらわす。ぶどう球菌、連鎖球菌、肺炎球菌、淋菌などの細菌に対し静菌作用をあらわすが、細菌の芽胞(炭疽菌、破傷風菌など)に対する効果は期待出来ない。		ショック(0.1%未満)	頻度不明(腎障害、骨髄抑制)	頻度不明(過敏症)				本剤又は他の水銀製剤に対し過敏症の既往歴、騎乗ヘルニヤの小児、粘膜面、口に触れる可能性のある部位(乳頭等)の消毒				外用にのみ使用すること、眼に入らないようにすること。使用量はできるだけ必要最少量にとどめること。深い創傷に使用する場合は希釈液としては、注射用水か滅菌水を用い、水道水や精製水を使用しない希釈する。水にアルカリ土金属、重金属、第二鉄塩、酸類、ヨウ素等が存在する場合、変質することがあるので注意。		長期間・広範囲に使用で水銀中毒を認めることあり		皮膚表面の一般消毒には、2%液を、創傷・潰瘍の殺菌・消毒には0.2~2%液を用いる。いずれも症状に応じて1日1~数回患部に適用する。		皮膚表面の一般消毒、創傷・潰瘍の殺菌・消毒		
ヨウ化カリウム	内服のみ																						
ヨウ素	カテックス軟膏0.9%	本剤は、ヨウ素による殺菌作用並びにカテキソマーが有する滲出液等の吸収効果により潰瘍治癒促進効果を示す。				0.1~1%未満(疼痛、刺激感、皮膚炎(発疹、水疱、発赤など)、そう痒)、新生児に他のヨウ素系製剤を使用し、甲状腺機能低下症を起こしたとの報告、臍内に他のヨウ素系製剤を使用し、血中無機ヨウ素値及び血中総ヨウ素値が上昇したとの報告、本剤はヨウ素含有製剤であるので、多量投与及び長期運用時には甲状腺機能の変動に注意する		ヨウ素過敏症	甲状腺機能に異常、重症の熱傷、腎不全、新生児、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人及び授乳中の婦人(長期・広範囲)					外用にのみ使用し、経口投与しない、眼科用には使用しない		妊婦又は妊娠している可能性のある婦人及び授乳中の婦人には長期にわたる広範囲の使用を避ける		潰瘍面を清拭後、通常1日1回、患部に約3mmの厚さに塗布する。(直径4cmあたり3gを目安に塗布する。) 滲出液の量が多い場合は、1日2回投与する。		褥瘡、皮膚潰瘍(熱傷潰瘍、下腿潰瘍)			

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化					
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	過敏反応	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ 化等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤 使用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
ヨウ素	プレポダイン ソリュション 有効ヨ ウ素 1g/100mL	・使用濃度 において、染 疫型細菌(グ ラム陽性菌、 グラム陰性 菌)、結核菌、 真菌、一部の ウイルスに有 効である。・ 細菌、真菌に 対する殺菌効 果、結核菌に 対する効果が 認められる。		アナフィラキ シー様症状 (0.1%未 満)	0.1%未満 (そう痒感、灼 熱感、皮膚潰 瘍、皮膚変 色、接触皮膚 炎、血中甲 状腺ホルモ ン値(T3、T4 値等)の上昇 あるいは低下 などの甲 状腺機能異 常)	(0.1%未 満) 過敏症	妊娠中及び授乳 中の婦人への長 期にわたる広範 の投与	本剤またはヨウ素 に対し過敏症の既 往歴、甲状腺機能 に異常、重症の熱 傷、新生児、膈内 投与、妊婦の膈内 長期投与(新生児 に過性の甲状腺 機能低下)		腫れに入らないよう 注意。外用のみ に使用する	妊娠中及び 授乳中の婦 人への長期 にわたる広 範囲の投与 で先天性甲 状腺機能低 下症の乳児、 溶液の大量 かつ長時間 の接触によ って皮膚変色、 接触皮膚炎		1.本剤を塗布する。2.本 剤を患部に塗布する。	1.手術部位(手 術野)の皮膚 の消毒、手術 部位(手術野) の粘膜炎の消 毒、2.皮膚・粘 膜の消毒、熱 傷皮膚面 の消毒
組織 修復 成分	アラントイン	配合剤のみ												
局所 麻酔 成分	塩酸ジブカ イン	ベルカミン 注、表面麻 酔類似と考 え使用	感覚・求心 神経のNa+ チャネルを 遮断すること により局所 麻酔作用を 発現する。効 力、持続性、 毒性いずれ も最大級の 局所麻酔薬 であるが、 より効力を 強めるため に局所鎮痛 薬以外の目 的にはエビ ネフリンを 添加して用 いる	過敏、虚脱等 の中毒症状 (頻度不明)	ショック(頻 度不明)	頻度不明(眼 気、不安、興 奮、露視、眩 暈、悪心・嘔 吐等)	頻度不明(過 敏症)	本剤に対し過敏 症の既往歴	本人又は両親、兄 弟に気管支喘息、 発疹、蕁麻疹等 のアレルギー反 応を起こしやす い体質。高齢者 、妊婦又は妊 婦性のある婦 人。				使用に際し、目的濃度の 水性注射液または水性液 として使用する。適宜増減 する。仙骨麻酔:0.05~ 0.1%注射液にエビネフリ ンを添加したものを用い、 通常成人10~30mgを使用 する。伝達麻酔(基準最 高用量:1回40mg):0.05~ 0.1%注射液にエビネフリ ンを添加したものを用い、 通常成人3~40mgを使用 する。浸潤麻酔(基準最 高用量:1回40mg):0.05~ 0.1%注射液にエビネフリ ンを添加したものを用い、 通常成人1~40mgを使用 する。表面麻酔:耳鼻咽 喉科領域の粘膜麻酔に は、1~2%液にエビネフ リンを添加したものを用 い、噴霧または塗布する。 眼科領域の麻酔には、 0.05~0.1%液にエビネフ リンを添加したものを用い、 通常成人には1~5滴を点 眼する。尿道粘膜麻酔 には、0.1%液にエビネフ リンを添加したものを用い、 通常成人男子10~20mg、 女子3~7mg・膀胱粘膜 麻酔には、0.025~0.05% 液にエビネフリンを添加 したものを用い、通常成人 10~20mg・局所鎮痛に は、0.025~0.05%液を用 い、適量を使用する。 歯科領域麻酔:0.1%注射 液にエビネフリンを添加 したものを用い、伝達麻酔・ 浸潤麻酔には通常成人1 ~2mg	仙骨麻酔、伝 達麻酔、浸潤 麻酔、表面麻 酔、歯科領域 における伝達 麻酔・浸潤麻 酔

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく留意性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ等に伴う使用環境の変化			
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの							
局所麻酔成分	リドカイン	キシロカイン液「4%」:塩酸リドカイン表面麻酔に類似のため使用	神経線維のナトリウムチャネルをブロックし、神経における活動電位の伝導を可逆的に抑制し、知覚神経及び運動神経を遮断する局所麻酔薬である。表面・浸潤・伝達麻酔効果は、塩酸プロカインよりも強く、作用持続時間は塩酸プロカインよりも長い。		意識障害、痙攣、痙攣(痙攣不明)	ショック(痙攣不明)	痙攣不明(眠気、不安、興奮、露視、眩暈、悪心・嘔吐)	痙攣不明(過敏症)		本剤の成分又はアミド型局所麻酔薬に対し過敏症の既往歴。	高齢者又は全身状態が不良。心刺激伝導障害。重症の肝機能障害又は腎機能障害。幼児。妊婦又は妊娠している可能性のある婦人。	過量投与で中毒症状が現れる。症状として中枢神経系(不安、興奮、意識消失、全身痙攣など)、心血管系(血圧低下、徐脈、循環虚脱など)が現れる。 ・眼科(点眼)用として使用しないこと。注射用として使用しない。	塩酸リドカインとして、通常成人では80~200mg(2~5mL)を使用する。なお、年齢、麻酔領域、部位、組織、体質により適宜増減する。 幼児(特に3歳以下)では低用量から投与を開始。	表面麻酔	
血管収縮成分	塩酸ナファゾリン	0.05%プリピナ液「チバ」、塩酸ナファゾリンの配合剤しかなかったため、硝酸ナファゾリンの点鼻薬を用いた	血管平滑筋のα-アドレナリン受容体に直接作用して血管を収縮させる。アドレナリンより強い末梢血管収縮作用を有し、作用持続時間も長い(ウサギ耳殻血管)。	MAO阻害薬(急激な血圧上昇)			・痙攣不明(眠気等の鎮静作用(特に小児)、神経過敏、頭痛、めまい、不眠症、血圧上昇、悪心・嘔吐、熱感、刺激感、嗅覚消失、反応性充血、長期投与で顆粒球減少・反応性の低下)	痙攣不明(過敏症)		本剤の成分に対し過敏症の既往歴、2歳未満の乳幼児(ショック)、MAO阻害剤の投与を受けている(急激な血圧上昇)。	冠動脈疾患、高血圧症、甲状腺機能亢進症、糖尿病、交感神経作用薬による不眠・めまいなどの既往、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児	連用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことあるので、急性充血期に限り使用するか又は適切な休薬期間において使用する。	眼科用として使用しないこと。過量投与により、主なる全身作用として、血圧上昇と二次作用として脳虚血がみられる。幼・小児では過量投与により、顕著な鎮静があらわれ、発汗、徐脈、昏睡等の全身症状があらわれやすい。連用・頻回投与により顆粒球減少・反応性の低下、局所粘膜の二次充血を起すことがある。	通常、成人鼻腔内には、1回2~4滴を1日数回、咽喉・喉頭には1回1~2mLを1日数回塗布又は噴霧する。なお、年齢、症状により適宜増減する。局所麻酔剤1mLあたり0.05%液2~4滴の割合で添加する。	上気道の諸疾患の充血・うっ血、上気道粘膜の表面麻酔時における局所麻酔剤の効力持続時間の延長
抗ヒスタミン成分	o-マレイン酸クロルフェニラミン	外用の添付文書無し													

しもやけ・あかぎれ用薬

製品群No. 55

ワークシートNo.35

リスクの程度 の評価	評価の視点	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が発生する おそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき 副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	酒酔薬忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化				
血行促進成分	酢酸トコフェロール	外用なので、ユベラ錠	微小循環系の賦活作用を有し、末梢血行を促す。腹安定化作用を有し、血管壁の透過性や血管抵抗性を改善する。抗酸化作用を有し、過酸化脂質の生成を抑制する。内分泌系の賦活作用を有し、内分泌系を正常化する。					0.1~5%未満(便秘、胃部不快感)、0.1%未満(下痢)	0.1%未満(過敏症)									錠剤 通常、成人には1回1~2錠(酢酸トコフェロールとして、50~100mg)を、1日2~3回経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。	1. ビタミンE欠乏症の予防及び治療 2. 末梢循環障害(間歇性跛行症、動脈硬化症、血栓性静脈炎、糖尿病性網膜症、凍瘡、四肢冷感症) 3. 過酸化脂質の増加防止
	トウガラシ	トウガラシチンキを使用						頻度不明(刺激感、疼痛)			ひ癩、創傷皮膚及び粘膜					原液で使用しない。入浴直後の使用は避ける。眼又は口の周囲に使用しない。		①通常、トウガラシチンキとして、10~40%を添加した液剤、軟膏剤、硬膏剤又はハップ剤を1日1~数回局所に塗布する。 ②通常、トウガラシチンキとして、1~4%を添加した液剤を1日1~数回局所に塗布する。	皮膚刺激剤として下記に用いる。 ①筋肉痛、凍瘡、凍傷(第1度) ②育毛
	ニコチン酸ベンジル	なし																	
角質軟化・皮膚保護成分	オリーブ油	日本薬局方オリーブ油																	軟膏、硬膏、リニメント剤などの基剤として調剤に用いる。皮膚、粘膜の保護に用いる。
	グリセリン	グリセリン																	・洗滌液の調剤に用いる。また、溶剤、軟膏基剤、湿潤・粘滑剤として調剤に用いる。 ・局所保護薬・外皮用として、皮膚、粘膜面を保護、軟化する目的で、口唇の亀裂、ひび、あかぎれ、皮膚のあれなどに用いる。

しもやけ・あかぎれ用薬

製品群No. 55

ワークシートNo.35

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化							
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	濫用に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果			
		併用禁忌(他 剤との併用によ り重大な問題 が発生するお それ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ				
ビタミンA	ザーネ軟膏	モルモットの 実験的角化 症に対する実験 において、 表皮の新陳 代謝を高め、 ケラチン形成 を抑制すること により過角 化症に効果を 発揮することが 認められて いる。				0.1～5%未 満 (紅斑、そう 痒) 0.1%未満 (発疹)								1日2～3回患部に塗擦す る	角化性皮膚疾 患(尋常性魚鱗 癬、毛孔性苔 癬、単純性皰 瘡)	
ワセリン	黄色ワセリ ン	局方から・黄 色であるほ か、白色ワセ リンと同じ規 格である。				頻度不明(接 触皮膚炎)									軟膏基剤とし て調剤に用い る。また、皮膚 保護剤として 用いる。	
	白色ワセリ ン(局方か ら) プロベト	局方から・中 性で、刺激性 がほとんどな く寒暖により、 粘稠度があま り変わらず、 植物性又は 動物性油脂 のように光 、湿気によつて 酸敗すること が少ない安定 な優れた軟膏 基剤である。 ・白色ワセリ ンは黄色ワセ リンをさらに 脱色したも ので本質的に相 違はない。				プロベト・頻 度不明(接触 皮膚炎)					プロベト・眼科用 の基剤として使 用する場合は、 調製後滅菌処理 をすること。 白色ワセリン 吸 水性と、皮膚へ の浸透性が少な く、粘着性が強 い。ろう、ステア リルアルコール 、ラリリンなどを 添加すれば吸水性 は増加する。ま た、発赤、発疹 、そう痒感等の過 敏症状があらわ れた場合には、 使用を中止する こと。 ・ときに、漂白操 作が不完全のため 、刺激性が黄色 ワセリンより強 いことがある。				プロベト・眼科 用軟膏基剤、 一般軟膏基剤 として調剤に 用いる。また、 皮膚保護剤と して用いる。白色 ワセリン：軟 膏基剤として 用いる。また、 皮膚保護剤と して用いる。下 界との接触及 び水分の蒸散 を遮断できる ため、創傷面 及び肉が面の 保護や手足の ひび、あか ぎれにそのま ま薄く塗布す る。	
鎮 痒 成 分	塩酸ジフェ ンヒドラミ ン	外用はなし ジフェンヒド ラミンはあり ーレスタミ ンコーワ軟膏	アレルギーを 塗布または皮 内注射したと きに起こる発 赤、膨疹、そ う痒などのア レルギー性皮 膚反応は、本 剤の1回塗布 により著明に 抑制される。			頻度不明(過 敏症)					炎症症状が 強い渗出性 の皮膚炎：適 切な外用剤 の使用でそ の炎症が軽 減後もかゆ みが残る場 合に使用す る。			使用部位：眼の まわりに使用し ない。	通常、症状により適量を1 日数回、患部に塗布また は塗擦する。	痒疹疹、湿疹、 小児ストロフル ス、皮膚そう痒 症、虫さされ

しもやけ・あかぎれ用薬

製品群No. 55

ワークシートNo.35

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
評価の視点			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
抗炎症成分	グリチルレチン酸 デルマクリン軟膏	グリチルレチン酸は急性炎症に対する抗炎症作用(浮腫抑制-ラット、肉芽腫抑制-ラット、抗紅斑-モルモット)を有する。抗炎症作用は主成分であるグリチルレチン酸の化学構造がハイドロコチゾンの化学構造に類似しているところによると推定される。					5%以上又は頻度不明(過敏症)							眼科用として使用しない			通常、症状により適量を1日数回患部に塗布または塗擦する。	湿疹、皮膚そう痒症、神経皮膚炎